

妙光寺九條袈裟(法燈国師所用)について

切 畑 健

この袈裟(挿図1)は『都名所図会』^(注1)に、藤原師継が法燈国師覚心を開基に迎え、別業を改めて寺にしたとある洛西の禅刹、正覚山妙光寺に伝えられるもので、その開山の料とする。さらに寺伝には国師入宋の師、無門慧開より伝領した伝法衣とする。

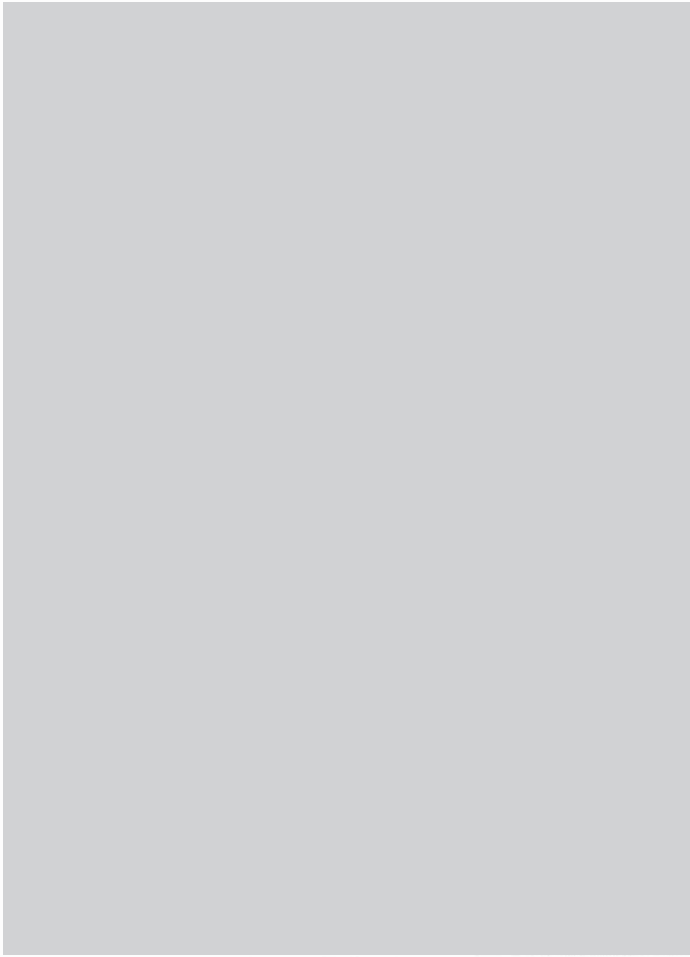
法燈国師は建永元年(一一〇六)信濃国神林に生れ、^(注2)姓は常澄氏、心地、覚心と号す。承久三年(一一三一)十五歳で神宮寺に投じて仏書を読み、嘉祿元年(一一三五)十九歳の時薙髪し東大寺で受具、のち高野山に登って密教を修める。建長元年(一一四九)春、無準師範に師事しようと商船に附して入宋したが、すでに無準は僵化し、やむなく各地に高僧をたずね霊場を巡り、やがて同六年(一一五四)博多に帰着する。ただちに高野山金剛三昧院に参じ、また紀州鷲津に遊ぶ。時に沙門願性あつて由良に西方寺を建立し、覚心を請じて開山とする。西方寺は後に興国寺と号し、覚心と密接な関係が生まれるのである。弘安八年(一一八五)藤原(花山院)師継が長男忠季の早逝供養のために、宇多野に営んだ別業の印金堂^(注3)を改め、子息の法名を寺名として妙光寺を開き、覚心を請じて始祖とする。^(注4)後いくばくもなく再度紀州に還り鷲津に住う。永仁六年(一一九八)十月十三

日入寂、寿九十二。龜山上皇は法燈禪師と諡し、後醍醐天皇は重ねて法燈円明国師とする。

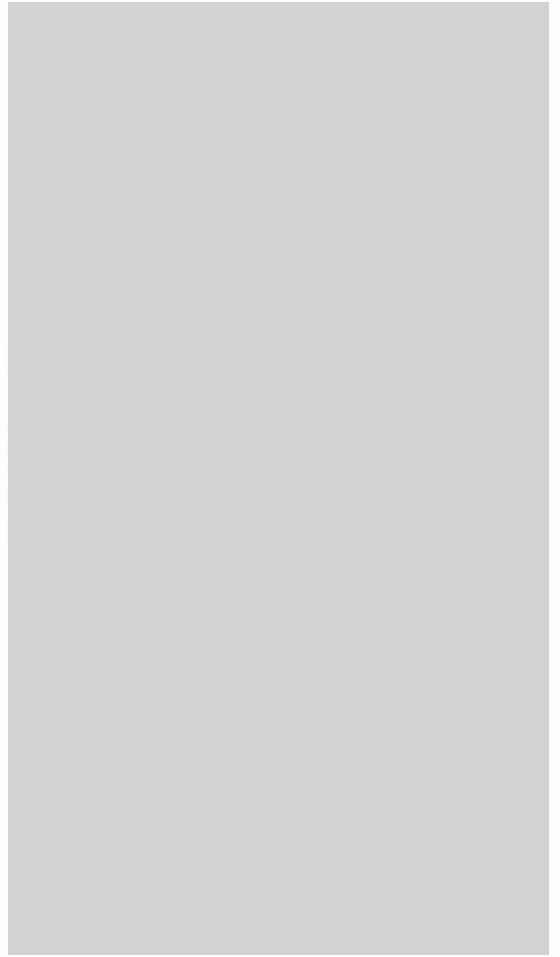
この袈裟は法燈国師の法衣として妙光寺に嚴重に伝えられたもので、後述のようにその伝承をうなづかせる年記などの墨書があり、中世の袈裟および染織の資料として重要な価値をもつ遺例と考えられるので、ここに紹介したい。

一 概 要

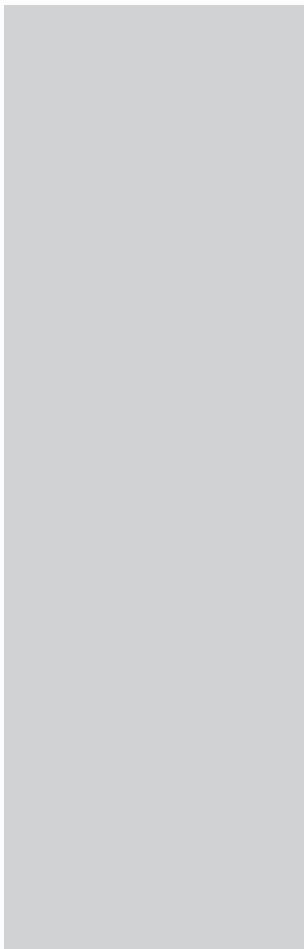
幅三四五・〇釐、最も長い部分の丈一三七・〇釐(挿図10)という禪家特有の^(注5)きわめて長大、特殊な形態の九条撰葉衣で、田相部をあらわす裂地に、豎条、横堤、縁、四撰などを針目細かく縫い載せた撰葉衣通例の施工をしめす。さらに全体に別の裏裂がつけられている。田相は三長一短の制によるが、左脇下を大きく割ることから、脇より前面に及ぶ三条分は変則的な仕立となり、一短の部分が全くなかったり、一長分が充分でなかったりする。また豎条等と共裂の前脾、後脾をそなえる。前脾の袂はすでに欠失し、後脾には紐を留



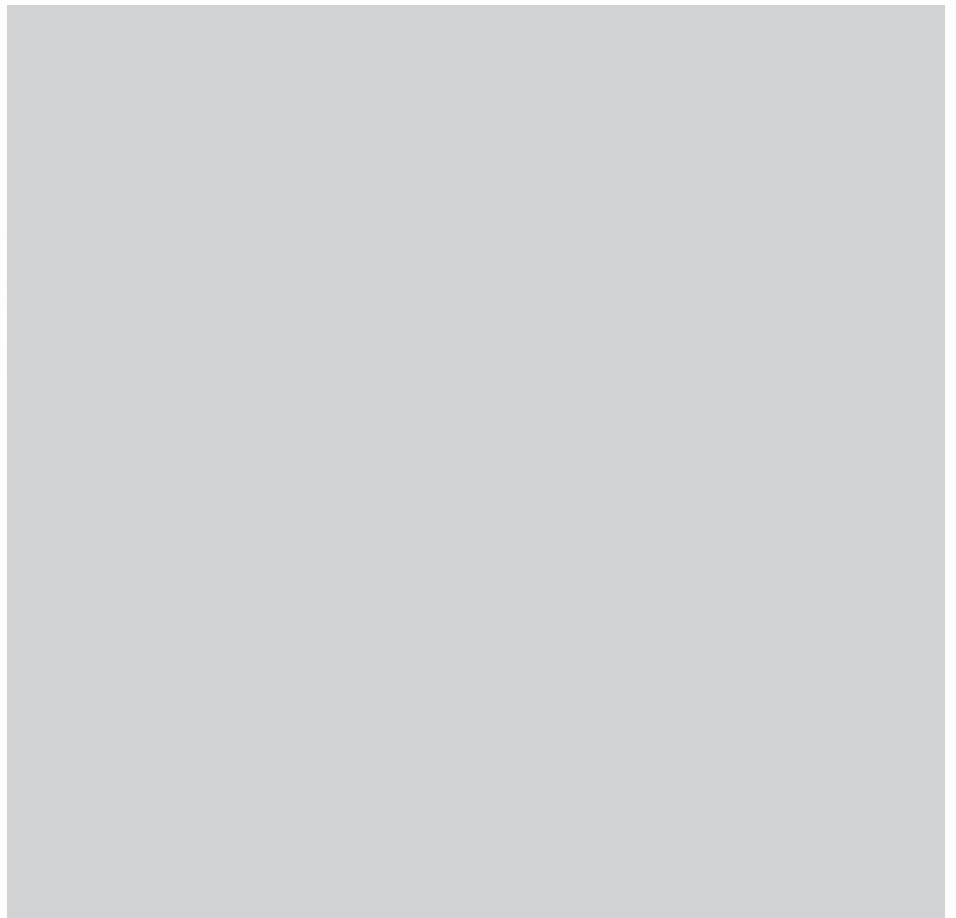
挿図 2 田相部(部分)



挿図 1 九条袈裟(部分)



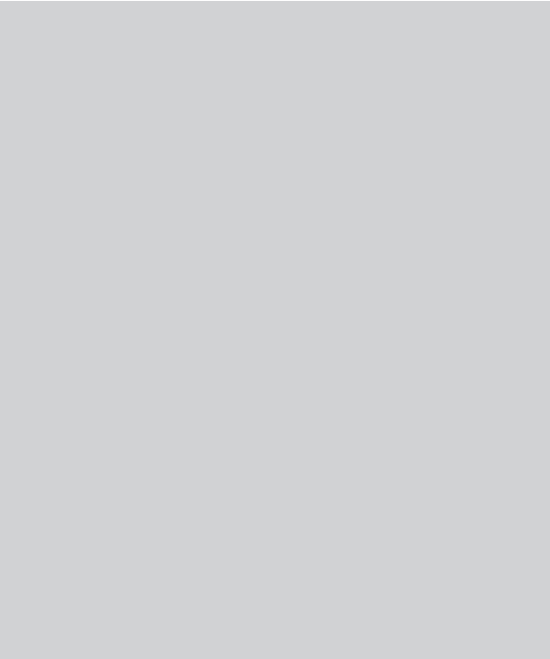
挿図 4 紐(部分)



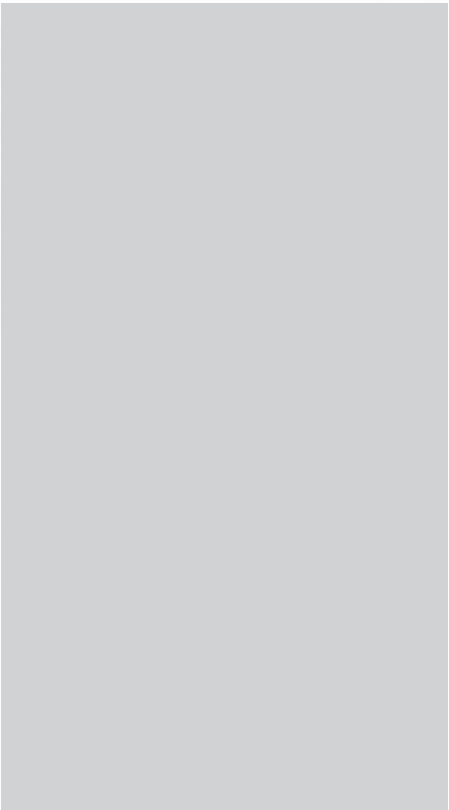
挿図 3 堅条・横堤部(部分)



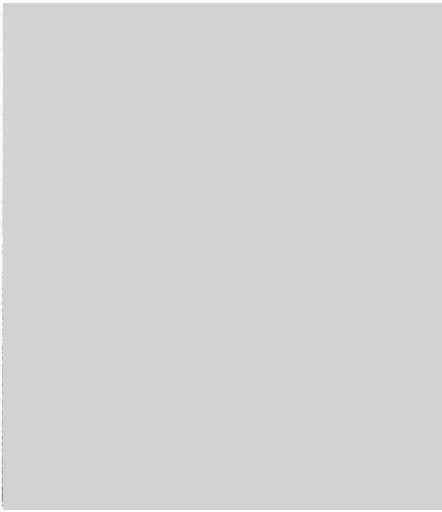
挿図6 萌葱地山茶花唐草文様綾組織拡大図(15/1倍)



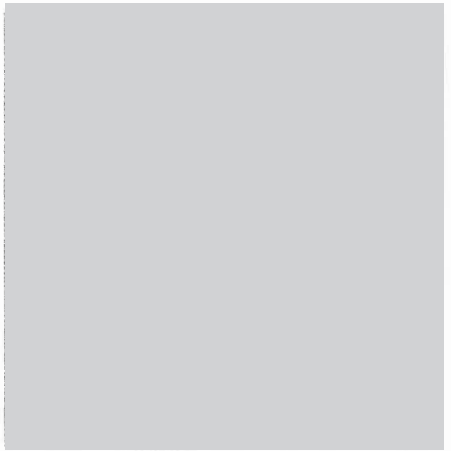
挿図5 黄地花入り菱と飛鳥花唐草文様浮織物組織拡大図(15/1倍)



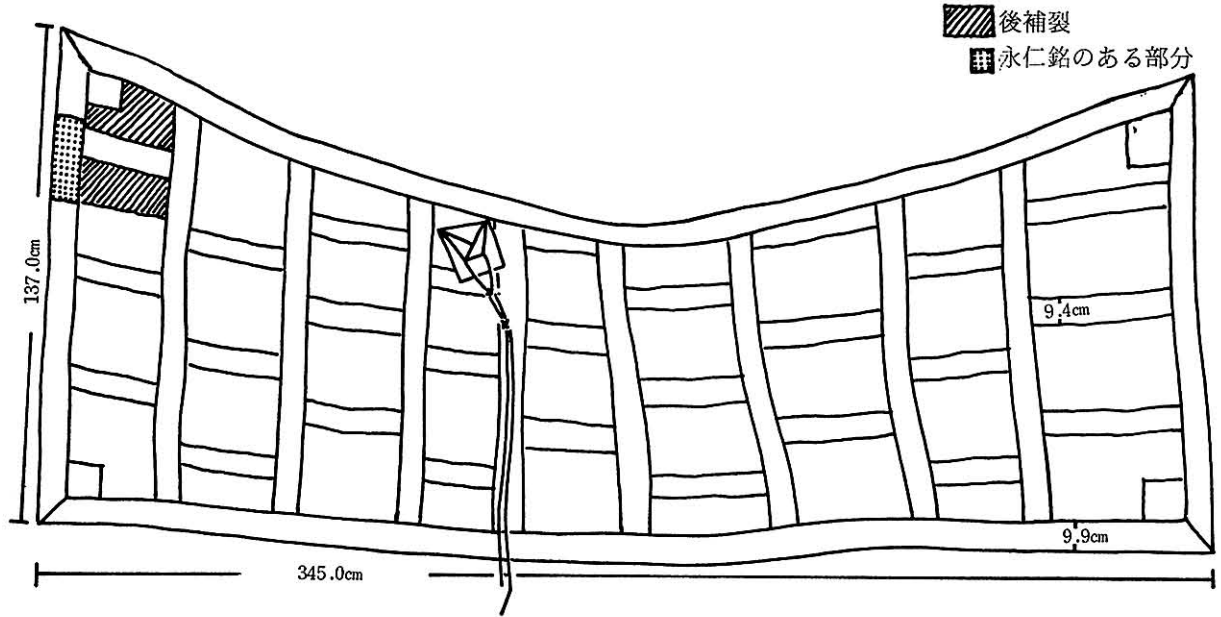
挿図9 縁部墨書



挿図8 後牌墨書



挿図7 前牌墨書



挿図10 九条袈裟(法燈国師所用)全景略図

どめる。なお着装時に左手にかかって、内側に垂下する箇所を田相二区に修補があり、後世の裂ととりかえられている。

全体に保存の状態は良好とはいえず、田相部には生経に特有の段状の切れが随所であり、裏裂も畳目にしたがって大破し、断片の脱落がはなはだしい。

イ 染色・組織など

・田相部——黄地花入り菱と飛鳥花唐草文様浮織物(図版1・挿図2) 現状は絹特有の輝くように美しい光沢をそなえた黄色を呈している。組織は経三枚綾地S流れで、二つ入りの箄目がある(挿図5)。

文様は地揚げの浮織物であらわされている。経・緯糸ともに無撚りで、経は生糸、緯は練糸で経の外見上約五倍の太さをしめす。経・緯ともに黄で経は緯よりもやや濃色をしめし、おそらく当初は紅色であったらしく現在なおわずかに紅味が感じられる。密度は一厘の間に(以下同様)経約五五本、緯約四〇越。文丈一二・一厘、窠間幅二四・三厘。ハツリは三本である。

・堅条・横堤・縁・四摺など——萌葱地山茶花唐草文様綾(挿図3) 経六枚綾地Z流れ、緯六枚綾文S流れ(挿図6)とし、糸は経・緯ともに同色で青味の勝った萌葱で撚りはない。緯は経の外見上約一・五―二倍の太さをしめす。密度は経約三七本、緯約四〇越。文丈一〇・五厘、窠間幅一二・六厘。三本ハツリ。

・裏裂——紅地無文平絹

ほのかに紅味の感じられる黄で、おそらく紅染の褪色と考えられる。経に二つ入りの箄目のある平組織で、練貫風に見え、さらに砧で打ったものらしく帛面が特有の平滑な状態をしめしている。経・

緯糸ともに無撚りで、緯は外見上経の約一・五―二倍の太さがある。密度は経約四五本、緯約三五越。

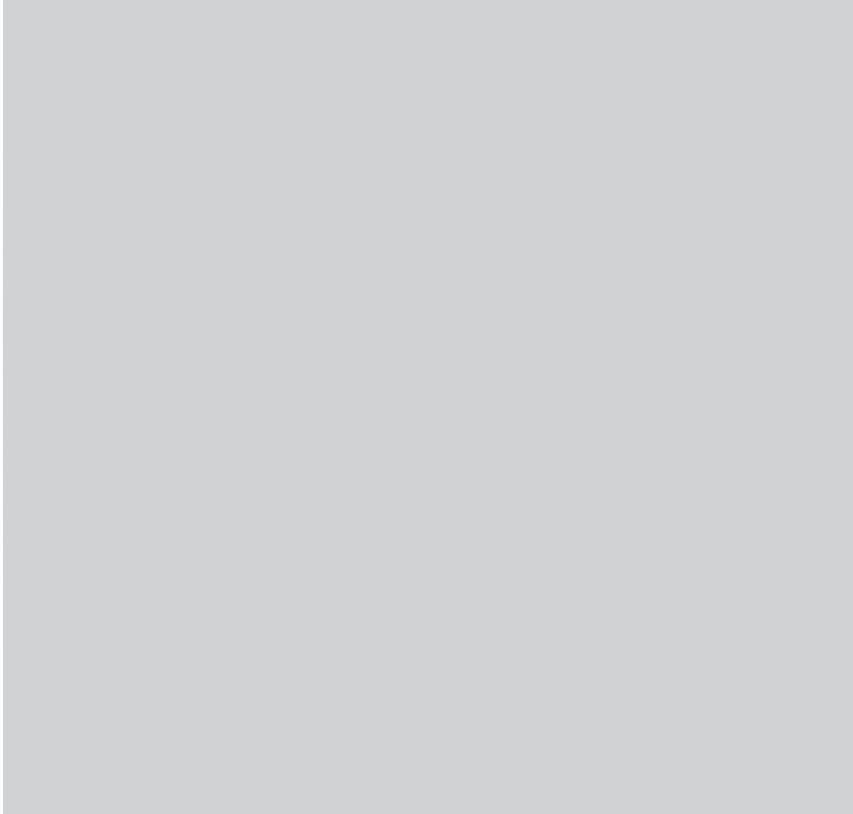
・紐(挿図4)

絹紅染。扁平八つ打紐。丈一一九・六糎。上方から八・五糎、二

一・〇糎の部所でそれぞれ変り総角に結ぶ。

・後補の裂――黄地菊唐草向い鶴菱文様綾(挿図11)

経五枚綾地Z流れ、緯五枚綾文S流れ。経緯ともに黄色の無撚



挿図11 田相部後補裂

糸。密度は経約三三本、緯約三八越。文丈四・四糎、窠間幅七・七糎。三本バツリと考えられる。

口 文様

・田相部

子持ち罝による菱形を互の目に配し、その周りに鳥や唐草をあらわした文様で、菱の内には中央に複雑な構成をしめす変り花菱形を据え、その四方に花や葉を添えて菱形にまとめる。周囲の空間をうずめる文様は菱の縦方向の中間に、典型的な花菱に半花形を四方に配して構成した小菱形を置き、さらに小牡丹もしくは小宝相華とも見える唐草に飛鳥を加え、その正逆を組合せて余の空間を充填する。この部分は地間に対してそれぞれの文様形象が鋭く引き締まってよく調和し、小牡丹の花弁の先端の小さな返りや、その蔓部の繊細な伸び、撓み、特に蔓端の巻き込みなどに注目すべきものがある。鳥は尾が短かくあらわされて、あたかも鴛鴦や鴨のように見られるが、冠があり鳳凰と考えるのがふさわしいであろう。他にも尾を短かく表現した例がある。^(注6)

・ 縦条部など

織幅の横方向へ曲線を見せて茎が延び、その先端に花をあらわし、さらに逆方向に転じた一花をつけ、さらに葉、蕾などを配したいわゆる花唐草文様である。花・葉ともに椿・山茶花もしくは通例の茶の花などの類と見られ、構成は一般的な花唐草文様であるが、細部に注目すると婉転する茎は単に曲弧を連ねたものではなく、一茎の先端に小蔓が巻き込み、さらにそこから新しい茎が派生するという現実感の名残りが感じられる。花をつける部分ではことさらに花

挿図12 梵字真言・偈文(部分) 法燈国師筆 興国寺蔵

柄を表現して小叉を見せ、花は五弁を宝相華風に類型化するが、葉の様相などになお實際を写そうとする意識がうかがえよう。それは葉の表現にも顕らかで、照葉樹のいかにも固い質感を、裏葉を返すただ一葉でよくしめし、また他の各葉が茎に確かに付くものなどにも細かい写生的な眼が感じられるのである。なお茎や蔓先の小さな巻込みは太細区まじまじ区で、これには生動感ある毛筆描の下絵の特色が伝えられているのであろう。

・後補部分

向い鶴菱と、中心に菊花を据えて四方に蔓を配してまとめた菱を、互の目に並べて繋ぎ文様とする。

一一 墨 書

前述のようにこの袈裟には三箇所墨書がある。一は前牌裂部の裏に書かれたもので、

入宋「覚心 (挿図7)

とあり、二は後牌裂部の裏面に

仏法「僧宝 (挿図8)

とある。いずれも焦墨で、力の籠ったきわめて勤儉な書体である。帛上に書く理由から筆に無理があり、やや上すべりしているが、それには書手が一そう緊張したさまをうかがうことができる。また三は左手にかかる袈裟の左端上部、内側に垂下する部分で、したがって袈裟の天地とは逆に書かれており。

永仁二年「十二月十日 (挿図9)

とある。この部分は先にも触れたように着装上、損じやすい箇所

で、すでに田相の裂も一部がとりかえられ、墨書部分も断爛がはげしい。焦墨を用いて、一、二と同様の筆緻でしつかりと書かれたが、現状ではかすれがちの外見を呈している。

さてこの三箇所の墨書が確かにこの袈裟の主と伝える法燈国師覚心の筆によるものかどうかについて、参照すべき一資料がある。広島県安国寺の法燈国師木像(注7)に納められた、建治元年(一二七五)国師の自筆になる「梵字真言・偈文」一通(挿図12)がそれで、巻末に年記があり、さらに袈裟墨書に等しい「仏法僧」や「覚心」の各字が見出せる。これらと袈裟墨書を比較すると、細部に多少の差異はあるものの、その勤直な人柄をあらわすかのように勤嚴ではあるが、決して能書と言うことはできない、いわゆる「金釘流」とでも形容できるような特色をしめしその筆法、形、さらに気分などに共通するものがある。したがって袈裟墨書は国師の自筆である可能性が強いといえよう。

三 結 び

以上のようにこの袈裟は、妙心寺開山法燈国師の料として、その妙光寺に伝えられ、しかも三箇所に貴重な墨書を有し、まさに法燈国師の料であることが濃厚となったのである。しかも永仁二年の年記からは、その入寂四年前の遺料と知られ、一方年記の明らかな資料に乏しい染織の分野では、ことに重要な存在といえるのである。

ところで、最初に述べた点に立ち戻って、この袈裟が国師入宋の師、無門慧開から授けられた伝法衣であるとする寺伝に注目しなければならぬ。それはこの田相部(後補の部分を除く)や豎条など

の裂地がはたして宋代の成織になるものとして良いかどうかの問題があるからで、あらためてその検討が必要となる。いま検討に充分な資料を用意してはいないが、文様の面から一つの見解を示しておきたい。

田相部の特色ある文様に類似する例として想起されるのは、西本願寺蔵三十六人家集の料紙に見られる雲母摺りの唐紙文様(注8)(挿図13)である。この三十六人家集は十二世紀前半期のもので、各料紙の装飾は特にそれまで築かれてきた和様諸意匠の集大成の観があり、造形が最高の域に達した見事な時代を反映したものである。また型摺りという表現技法やその規模の違いもはなはだしく、袈裟文様と同列に論じ得ないことはいうまでもないが、両者の作風には顕著な懸隔が感じられる。先ず型摺文様はおだやかに柔らいだ華やかさをしめし優雅である。しかし空間感覚に乏しく、ただ花・葉による唐草



挿図13 三十六人家集(西本願寺蔵)料紙文様略図



挿図14 表袴(熊野速玉大社蔵)椿唐草文様略図

が空間を埋めるに過ぎない。また花と葉や蔓の関係もそれほど緊密とはいえない。ところがこの田相部の文様は空間をしつかりとらえていると見られ、二重菱と花菱で相似形を繰り返えし、さらにその間に配される双鳥と双花の位置感覚が的確で文様の素描力が確かである。また花と蔓の関係は、小なりといえどもあたかも名物裂の牡丹唐草文様のような堂堂とした気分を与えるようである。さらに飛鳥の脚部の簡潔な表現なども注目されよう。また菱文様は当代の錦(注9)の文様に見出されるが、この田相部の場合は菱の内部文様や地間文様に細やかな変化と格調ある充実感が見られて格段の差がある。

次に豎条などの綾である。この文様についてもまた時代を異にした類似の例があげられよう。熊野速玉大社蔵、同社伝来古神宝類(注10)に属する、表袴と唐衣の椿唐草文様(挿図14)である。この文様はかなり大振りで、この種唐草の文様の通例にしたがって、花葉をつけた茎が婉転する文様である。しかし茎はこの袈裟のような実在感に乏しく、ただ抽象的な一本の線が伸びているに過ぎない。又葉も同型の繰り返しである。花も同様にいわゆる唐花に分類されるものほとんど類似し、花卉の中央に切り込みがあらわされている。

以上のように袈裟裂の文様上の特色には、比較例にあげたものと時代差を感じさせる外に、中国よりの舶載裂らしい表現感覚を指摘できるように思えるのである。

ところで、いまいちどその組織や糸質などに注意すると、田相部は平安時代以来、有職織物の系統にある浮織物であり、また用糸はいずれも無撚で、生経を混えている。拡大鏡下に見る糸質はほのかに柔らかな風合いをしめし、時代をほぼ同じうすると考えられる二、三の名物裂(注11)が、素朴ともいえるたくましい糸質をしめすのと

附表1 法燈国師略年表

年号	西 歴	年齢	事 項
建永元	一一〇六	1	信濃国神林にて生る。
承久三	一一二一	15	神宮寺に入って仏書を読む。
嘉祿元	一一二五	19	薙髪し東大寺で受具する。
延応元	一二三九	33	高野山で密学を修める。
宝治元	一二四七	41	行勇に従って、相模寿福寺に移る。
二	一二四八	42	上野長楽寺に至り円朝に参す。
建長元	一二四九	43	京に入り勝林寺天祐に、謁入宋の志をいやく。
二	一二五〇	44	又東福寺に聖一國師を訪い、入宋して無準に参することをすすめられる。
建長六	一二五四	48	入宋、すぐに径山におもむく。
康元元	一二五六	50	荆叟班に参す。
正嘉元	一二五七	51	この間、四明、育王、五台山、大梅山等ほとんどの霊場をめぐる。
二	一二五八	52	博多に帰着、高野山金剛三昧院に至る。
文応元	一二六〇	54	水晶数珠並書を仏眼(宋)に寄す。
建治元	一二七五	69	金剛三昧院に出世。
弘安八	一二八五	79	嗣書を仏眼に奉ず、紀州鷲峯に遊び、その絶勝を愛してここを終焉の地にしようと思ふ。
永仁二	一二九四	88	仏眼より書並に法衣一頂、七葉の図一鋪を寄せ来る。
六	一二九八	92	十二月十八日、安国寺像納入梵字真言・偈文。花山院師継妙光寺を創め覚心を開山とする。ほどなく紀州に還る。十二月十日、妙光寺蔵九条衣墨書。以後南紀に於いて教化活動に力を尽くす。十月十三日寂。龜山上皇法燈禪師と勅諡し、後醍醐天皇、重ねて法燈円明国師と追諡する。

は全く異なっている。^(注12)この面からはまた我国成織の裂かとも考えられるのである。また伝法衣として伝えられる諸寺の袈裟は、二、三の例外はあるものの、錦、頭文紗、印金(羅・紗地)、金銀欄、緞子(附表2参照)などと豪華をきわめるのが通例のようであるが、この袈裟は軽やかで、平明な美しさが特色といえよう。

以上のようにこの九条袈裟が妙光寺開山法燈国師所用であるとする伝承はほぼうなづけ、なお問題を残すものの、国師帰朝の際宋から舶載された伝法衣である可能性も濃厚で、中世染織史に貴重な資料を加える例として注目されるものである。

終りに「永仁二年十二月十日」の記録であるが、『本朝高僧伝』によれば、国師は妙光寺開山に迎えられたが程なく紀州に還ったとあり、国師が京洛と紀州を行き来していたことを想わせる。ところが、すでに最晩年に達した国師は自ら察するところあり、死の四年前に別れの意を籠めて年記をしたため、この九条衣を遺物として妙光寺に留めたのであるかもしれない。このように想像すると、また別にこの袈裟にひとしおの感慨を禁じ得ない。

〈注〉

1 『都名所図会』巻之六 後玄武

妙光寺は鳴滝の里の北にあり。初めは内大臣藤師継の長男右少将忠年(幼名妙光)追福のため、北山の別業を寺となし、妙光禪寺と号す。開基は法燈国師なり。本尊は釈迦仏を安ず。宝陀閣の額は木庵和尚の筆なり。紫金台の旧地はうしろの山上に遺る。印金堂は堂内の四方、惣印金を押して、当所の壯観ごとくにとゞまる。

2 法燈国師の略伝は附表1を参照。なおこの表は『元享釈書』第六、『本朝高僧伝』第二十によったものである。

草文様綾、四つ菱入り入子菱ならべ文様綾などは無撚の軽やかな糸が用いられていると考えられる。

- 3 『都名所図会』（注1）にも記されるように、印金堂は妙光寺本堂の背後にあり、堂内の四囲・天井などに中国渡来の印金裂を貼りめぐらした堂で壯麗無比とされた。その裂は堂とともに破損し、また盗難にあうなどしたが、切り取って帖に貼り込まれ、山水人物図青貝螺鈿の美事な堂扉一双とともに保管されわずかに往時をしのばせている。
- 4 法燈国師の妙光寺開基を『本朝高僧伝』では永仁三年とし、さらに「考行実年譜作弘安八年」と注記するが、本袈裟の墨書によっても開基は少なくとも永仁二年以前と考えられる。
- 5 『元享釈書』第二に、当時帰朝の栄西の長大な法衣を珍らしがつて次の興味深い記述がある。
元久二年春三月幾旬大風。都人謠言。比来西師新唱禪要。其徒衣服異製。取梨博幅。直撥大袖。行道之時多含鷗風。今異二作災恐基於西乎。
- 6 清涼寺蔵、釈迦如来立像（北宋・九八五）胎内納入裂断片中に、向かい鳳凰丸文様錦があつて尾が短かくあらわされ、また救世熱海美術館蔵青磁飛鳳文蓋物の蓋表に同様の尾の短い鳳凰文様が見られる。
- 7 本像には次のように各種の胎内納入物がある。
(1)水晶舍利塔 一基、(2)修理記（寛文四年）一通、(3)梵字真言・偈文（建治元年）一通。
- 8 この文様は各帖に見られるが、例えば「猿丸集」など。
- 9 西大寺蔵 騎獅文殊菩薩像胎内納入物の内に菊花入り菱ならべ文様錦裂がある。
- 10 熊野速玉大社蔵古神宝類は調進目録によれば、至徳―明徳（一三三四―一三九三）頃、足利義満を中心に諸国守護職によって調進奉納されたものとわかる。
- 11 京都国立博物館蔵、前田家伝来の名物裂中に、双鳳丸文様金襴（二人静金襴）、作土形草花文様金襴（鶏頭金襴）、雲繋ぎ宝尽し文様金襴（富田金襴）などがある。
- 12 しかし、注6にもあげた清涼寺釈迦如来像胎内納入裂の中には花葉唐

附表2 京洛寺院所伝中世伝法衣一覽(抄)

注 所持者は寺伝にしたがい、歿年順とした。

所持	歿年号	西歴	寿	種類	田相	条葉その他	所在	備考
破庵	嘉定 四	一一一一	76	九条	紅・紫平絹地刺衲	紅地刺衲うつし菱織	東福寺	糞掃衣の制になるもの
無準	淳祐 九	一二四九		九条	浅葱花雲鶴等文様錦	紫地無文羅	〃	田相部大破
〃	〃	〃		九条	紫地文紗(文様不明)	淡萌葱地花唐草文様紗	正伝寺	田相部ほとんど脱落
聖一	弘安 三	一二八〇		九条	(不明)	小石畳文様錦	東福寺	田相部欠失
宝覚	正応 四	一二九一	80	九条	茶地小花文様綾	黒地無文紗	万寿寺	田相部ほとんど脱落
慧暁	永仁 五	一二九七	75	九条	白茶地孔雀牡丹鶴龜雲気文様錦	藍地唐花つなぎ文綾	栗棘庵	
法燈		一二七八	92	九条	黄地花入り菱と飛鳥花唐草文様浮織物	萌葱地山茶花唐草文様綾	妙光寺	
双峯	建武 二	一三三五	73	九条	黒地無文麻	黒地無文麻	桂昌院	
正澄	暦応 二	一三三九	66	九条	金茶地唐花唐草文様紗	紫地宝相華唐草文様印金羅	聴松院	田相部後補か
普寧	至正 七	一三四七		九条	椽地牡丹椿唐草文様紗	紺地牡丹唐草文様紗	正伝寺	
慈明	永徳 三	一三八三		九条	紅地卍字入二重菱つなぎ梅唐草文様綾	白地入子菱つなぎ二重蔓牡丹文様金地金襴	三秀院	覆輪に紅地印金羅を用いている
周沢	嘉慶 二	一三八八		二十五条	浅葱地牡丹唐草文様印金綾	紅地花入り雷文繹文様綾	京博(相国寺)	「応夢衣」ただし寺伝に無準の法衣とする
正統	康応 元	一三八九	64	九条	紅地牡丹唐草文様金襴	紺地宝相華唐草文様金襴	長得院	
中津	応永 二	一四〇五		二十五条	紅地雲唐花宝尽文様緞子	紅地宝相華唐草八宝文様緞子 縁一紅地宝相華唐草八宝文様金襴	〃	別織を用いた特殊なものの
〃	〃	〃		九条	金茶地無文平絹	浅葱地無文平絹	〃	
明応	一四 一	一四〇七	80	九条	紫地竹雲麒麟文様綾	蘇芳地雲繫ぎ宝尽し文様金襴	慈濟院	現状では八条
円鑑	一七 一	一四一〇		九条	金茶地唐花菱文様紗	藍地唐花菱文様紗	永明院	
岐陽	三一 一	一四二四	62	九条	紫地無文綾	金茶地梅唐草飛鶴文様綾	靈雲院	四摺に紅地牡丹唐草文銀襴をつける
玄承	寛正 三	一四六二	70	九条	蘇芳地毘沙門亀甲繫ぎ文様銀襴	紺地卍字入子菱繫ぎ菩提樹唐草文様銀襴	龍安寺	